



マッセ・市民セミナー
(一般財団法人大阪府男女共同参画推進財団共催)

女性にとってよいまちは、みんなにとってよいまち
～持続可能なまちづくりを考える～

開催日：令和元年11月15日(金)

会 場：ドーンセンター パフォーマンススペース (1階)

マッセ・市民セミナー

女性にとってよいまちは、みんなにとってよいまち ～持続可能なまちづくりを考える～

講師：マリ・クリスティーン 氏
(異文化コミュニケーター、元国連ハビタット親善大使)

聞き手：白 井 文 氏
(一財)大阪府男女共同参画推進財団業務執行理事、前尼崎市長)

日時：令和元年11月15日(金) 14:30～16:45

会場：ドーンセンター パフォーマンススペース (1階)

第1部 講演

講師：マリ・クリスティーン

(異文化コミュニケーター、元国連ハビタット親善大使)

1. はじめに

企業の女性社外取締役や役員、また起業をしている女性も多くはなっていますが、日本は女性たちにとって活躍できる場はあるものの、まだまだ開かれていません。そこが私にとっても非常に歯がゆいところです。今日は少し世界の状況を話しながら、女性にとってよいまちづくりはみんなにとってよいまちづくりという話をさせていただきます。

2. 世界の現状

今、世界の人口は75億人、15歳未満の子どもは19億人です。その中で、学校に行けない子どもの数は1億2,300人です。これは2年前のユニセフの数字です。教育を受けられない主な理由は、貧困や社会的・文化的慣習です。貧困により学校へ行くお金がなかったり、女の子は教育を受ける必要がないという社会的・文化的慣習がある国がまだまだたくさんあります。その他、近くに学校がないこと、家の手伝い、教室や通学路が安全でない、安全な水が手に入らない、トイレがないといったことも、子どもが教育を受けられない背景要因として挙げられます。貧困や近くに学校がないということ以外は、女性にとっても関わっていることなのです。

「すべての人に包摂的かつ公平な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」ということがSDGsの4番目の目標に位置付けられています。発展途上国と先進国

がどのように自分の生活している環境の中でSDGsに取り組むべきでしょうか。日本には基本的に学校に行けない子どもたちはいませんが、発展途上国ではこれがとても大きな課題なのです。

私はタイの山岳民族の子どもたちの教育支援を1996年から行って、今までにタイに約10か所の学校を作りました。元々学校のある所に寄宿舎や校舎を作り、企業や個人から寄付を頂いて行っています。タイの山岳地帯には約100万人の山岳民族が住んでいます。自然と共存しながら暮らしていますが、貨幣経済の流入などにより貧困を余儀なくされている人々も少なくありません。ほとんどの人々が高床式の家に住んでおり、床下には豚を飼っています。豚がいると、生まれた子豚を市場で売ることができるので、持続的に豚が子どもを産んでさえくれればお金は入ってくるわけです。

タイ北部のミャンマーとの国境近くに住むカレン族の村では、家事は女の子たちがします。高床式の家の中にいろいろのようなものがあり、小さい時から両親のお手伝いをしています。タイの政府からの支援がなかなか山の中まで届かないため、教室が足りない状況も多々見受けられます。空教室という聞こえは良いのですが、雨期にはバケツをひっくり返したような雨が降ってくるので勉強ができません。屋根のある学校が必要なので、私たちは学校建設事業を始めました。

この子どもたちは全員学校に行くことができていますが、少し危ない所へ行くと子どもたちが児童労働に従事している場合もあります。一昨年のILO（国際労働機関）の報告では、児童労働に従事する子どもは世界で1億5,200万人、男の子が8,800万人、女の子が6,400万人です。そのうち、子どもの兵士や人身売買、児童買春、麻薬売買など最悪の形態の児童労働に関わっているのが7,300万人です。児童労働とは、18歳未満の子どもの健全な成長を妨げる労働のことです。そして、体や心の健康を害したり、学ぶ機会も与えられたりしていません。児童労働は子どもの権利条約やILOの最悪の形態の児童労働条約などで禁止されています。いろいろな形の児童労働があり、昔の日本でも子どもたちは仕事をしていました。

バングラデシュで日干しレンガを作っている子どもたちは、朝から晩まで、重いレンガを頭に載せて運ぶので、首の骨への負担が大きいです。ごみ捨て場でくず鉄を拾っている子どもたちもいます。磁石で鉄を拾い集めて売ります。サッカーボールを縫っている子どもたちもいます。今は児童労働で作られたサッカーボールを売ってはいけないことになっていますが、まだまだ子どもたちはいろいろなことをさせられています。

これまで述べてきたように様々な状況から教育を受けられない子どもがいるため、大人になっても字が読めない人が7億8,100万人もいます。それは世界の成人の6人に1人で、その3分の2が女性なのです。アフリカの識字率は全体的に低く、アジアの中ではアフガニスタンが最も低くて38.2%、IT産業を中心に経済発展を遂げているイメージの強いインドでさえ識字率が71.2%です。

文字が読めないということはどういう状況かということを考えてみて下さい。このコップにはクメール語でそれぞれ水、薬、毒と書かれています。家族の誰かが病気に



なってしまった時、あなたならどのコップをその病人に飲ませますか？

文字が読めなければ間違えて毒を飲ませてしまうことにもなりかねません。文字を読むことができないということが命の危険とも隣り合わせになってしまうのです。日本は世界で一番識字率が高いと言われていますが、アメリカにも学校に行っていない子どもたちが

文字が読めないということとは？



大勢います。特に田舎の、あまり政府の目が行き届かない地域では非常に多いです。教育を受けられないと読み書きができない。安定した職業に就けない。収入が少なく、貧困から抜け出すことができない。これが貧困の連鎖なのです。

さらに子どもを取り巻く課題で大変問題なのが児童婚です。この写真は、おじいちゃんと孫に見えますが、この子どもは男性のお嫁さんです。ロシアでもインドでもあります。児童婚は18歳未満の結婚ですが、世界では7億人以上の女性が18歳未満で結婚し、そのうち3人に1人以上、約2億5,000万人が15歳未満で結婚しているわけです。児童婚をする子どもの数は2050年までに、現在の1億2,500万人から、3億1,000万人に増加する見込みという、とても信じられない現状があります。

児童婚は、健康への悪影響、早過ぎる妊娠、ドメスティック・バイオレンス、貧困、HIV感染などを引き起こします。早過ぎる妊娠で、子どもを産むときに母子ともに亡くなってしまうことも多くあります。2013年の統計では新たにエイズに感染したアフリカの少女のうち、74%が児童婚でした。体が成長していない上に医療施設もない所での出産の場合は、難産から産道に穴が空いて膀胱や腸とつながり、尿や便が垂れ流しになる産科フィスチュラの問題にもつながります。

デニ・ムクウェゲさんは、昨年、ナディア・ムラドさんとともにノーベル平和賞を受賞しました。彼は性被害を受けた子どもや女性たちを治すコンゴ民主共和国の医師として大変有名です。コンゴでは、長く続いている内戦の中で戦争の武器として「レイプ」が行われるということが頻繁にあります。村人や家族の面前でのレイプは本当に残酷で、人々を震え上がらせ、精神的苦しみ（トラウマ）を、女性だけでなく、夫や子どもや村人すべてに与えます。そうすることで家族を分断し、村の共同体を壊すというような残酷なことが行われており、子どもまでが被害者になっています。ムクウェゲ医師は女性の体を修復するのみならず、心のケアを行い、彼らが立ち直って暮らしていけるようにしていらっしやいます。

ナディア・ムラドさんは、ISに性奴隷として拉致されました。命からがら逃げだし救出されてからは、自分のような女性が大勢いることを世界中に伝え、性暴力の防止のために戦っていらっしやいます。

WHO（世界保健機関）では、19歳以下の場合、出産に耐える体が出来上がっていないので、望ましくないとしています。15歳未満で出産時に死亡するリスクは20代の5倍

とっています。アジア・アフリカなどの農村部では、正しい専門知識のある医師や助産師による出産・手術が行われる病院が少なく、存在していたとしても通院にかかる費用が更なる貧困に陥れてしまうので、貧困から抜け出せない仕組みや状態になっているのです。

世界の妊産婦死亡数は年間30万3,000人にも上り、毎日800人が妊娠と出産で命を落としているのです。サハラ砂漠以南のアフリカ地域が20万1,000万人で、全体の66%を占めます。女性の健康が脅かされる理由は、保健サービスが整備されていない、性的差別や経済的な理由で保健サービスを受けられない、文化的な規範によって女性の外出が制限されたり、慣習や宗教的な理由から男性の医師による治療を受けられない、食料や水を確保したり薪を集める仕事をするために保健サービスを受ける時間が制限されるといったことがあります。アフリカのサブサハラはイスラム教徒が非常に多く住んでいる地域です。男女は別々にいなくてはならないし、子どもたちは小さいときに許嫁となることと交換に牛や羊などをもらいます。自分の娘を嫁に出すのではなく、売っているわけです。

3. ジェンダーの目標

SDGsの目標5は、「ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女兒の能力強化を行う」です。「ジェンダー」とは「女性の」と思っている方もいると思いますが、ここには男性も入っています。ジェンダーとは、生物学的な性差ではなく、社会的・文化的に構築されたものです。男は働いて家族を養うべき、女性にリーダーは無理だ、男性は理系、女性は文系、おしとやかな女性がいい、家事・育児は女性の仕事。こういうことは社会がつくった差別で、ある意味で私たちに押し付けているものです。

世界にはジェンダーの不平等で、女性の立場が弱い国が多数あります。貧困や教育、結婚、出産、病気など、開発途上国の女性を取り巻く課題の多くはジェンダーに起因する不平等が背景にあります。ジェンダーに基づく不平等が国家の発展や社会の進化を妨げ、男性・女性の双方に不利益をもたらしているのです。結婚しても家で子育てをしたいと思う男性もいると思うし、外で働きたいと思っている女性もいると思います。男性だから、女性だからと決めるのではなく、自分がしたい生き方ができることがとても大事です。

世界経済フォーラムが出すジェンダー・ギャップ指数で、2017年は日本は114位でした。この指数は経済、教育、健康、政治の分野のデータから作成されますが、日本は経済的参加度、給料や所得の男女平等、管理職・技術職・専門職の男女平等、女性の議員やリーダーが少ない、決定をする場所に女性が少ないのです。教育では識字率、初等教育および高等専門教育の就学が65位です。これは、例の医学部の試験で男性を優遇していたということがあったので、前年度よりも下がっています。普段はもう少し高いです。保健では、出生時の男女比・健康寿命が世界で41位です。政治への参加分野では、国会議員、閣僚、国家元首の女性の比率は125位です。総合的には、2018年12月で110位、今

年は何位か、大変楽しみです。

4. 安全な水とトイレをみんなに

SDGsの目標6は「全ての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」です。世界には、飲料水としての安全な水が手に入れない人が約7億8,000万人います。約10人に1人です。そのうち、1億4,400万人が湖や川、用水路など未処理の地表水を使用しています。不衛生な水しか手に入らず、下痢などで命を落とす子どもたちが毎年30万人（1日800人）います。水くみはほとんど女性や子どもの仕事で、それは重労働です。水くみのために、学校へ行くことができない子どもたちもいます。

タンザニアに行くと、重いバケツを小さい子どものときから頭の上に乗せて、何時間も歩いて水をくみに行っています。アフガニスタンでも子どもたちが水くみをしていて、小さなじょうろを持って歩いていました。ケニアでは地表水を使用しています。雨が降ったりすると人間の汚物と混ざってしまうのです。沸騰してろ過する技術や知識のない人がたくさんいるので、コレラや赤痢などの伝染病に苦しめられ、その薬代でまた貧困になってしまいます。不衛生な水には寄生虫の卵や幼虫なども含まれていて、成長した虫が皮膚を破って出てくることもあります。そして、結局、安全かどうか分からない水を、高い値段で購入させられてしまうことが貧困をさらに深刻にします。安全な水にアクセスできないのは、主に東南アジアやアフリカなどの途上国です。その中には、地下水を飲料水源として利用している地域が多くありますが、その地下水さえも自然の地質からフッ素やヒ素が溶解していたりします。

食料自給率40%の日本が穀物や肉類などを輸入しているのですが、それらの生産には大量の水が使われています。日本が海外から輸入する食料の生産に使われる水を仮想水（バーチャルウォーター）として換算すると、年間約640億トンで、琵琶湖の貯水量の約2.5倍です。トウモロコシは145億トン、牛肉は140億トンの水が使用されるわけです。

世界中でトイレなどの衛生設備を持っていない人は約24億人、世界人口の3人に1人です。そのうちの9億5,000万人が野外排せつをしています。それは下痢やコレラなどの感染症の原因となり、環境汚染にもつながります。そして、プライバシーや人間の尊厳が守られないことが一番恐いことです。レイプなどの危険と隣り合わせです。女性たちはいつも危ない目に遭うのです。

ナイロビから少し離れた所なのですが、コミュニティーの簡易トイレが村の中にありました。そこがいっぱいになると、別の所でまたトイレを作ります。このトイレは女性や子どもにはとても危険です。子どもは落ちることもあります。女の子たちは夜、トイレに行きません。途中で性暴力を受けたり、誘拐されたりする危険性があるからです。しかし、我慢すると病気になったりしてしまいます。私も国連ハビタット親善大使をやっていたときは、ナイロビやアフリカのいろいろな地域へ出かけていきました。世界で一番大きなスラムがあるのは、キベラというナイロビの近くにある所です。家の中にトイレがないので、フライング・トイレといって、ビニール袋に排せつ物を入れて遠く

に投げるのです。スラムは谷間にまちづくりがされているので、谷間にもものが流れてきて、非常に不衛生です。そのようなスラムで生活をしなければならぬ人々が都会を目指してくるので、2050年までには世界人口の7割は都市で生活するようになります。そしてその生活を支えていくのは女性たちなのです。

カンボジアのスラムでは、川の上に家を建てており、家の中に穴を作ってトイレとして使っていました。下の川に全部落ちて流れていきます。スコールなどで川の水が家の中にあふれてくることも度々あり、不衛生で危険なため、私たちはここでトイレを作りました。水位が上がってもちゃんと歩けるようにコンクリートも敷きました。

私たちがお手伝いしたケニアの学校は、トイレが二つしかないのに、66人の生徒たちが勉強をしていました。最後の子がトイレをすますころにはもう授業が終わっています。また、思春期の女の子たちは生理のときは学校を休みがちなので、勉強についていけなくなります。トイレのない学校には、先生も行きたがりません。

そこで、私が副会長を務めている日本ハピタット協会ではトイレを作っています。LIXILが作っている汚物を非常に少ない水で流せるもので、落ちてまたふたが上がってくるので、衛生的にも良く、臭いも防いでくれます。2017年の調査で、30億人が、石けんや水が備えられた手洗い設備が自宅にない環境で暮らしていると発表されていますので、手洗いの重要性も同時に伝えています。

日本のSDGsの取り組みは149か国中18位です。教育と、水とトイレ、産業の技術革新は、達成の度合いが高いと評価されています。しかし、ジェンダー平等、エネルギー、気候変動、海洋、生態系、森林、パートナーシップという目標については達成度が低いと評価されています。何となく文化が表れている感じもするのですが、ジェンダー平等の中で、真剣に考えていかなければならないのは性別の役割分業が、いまだに深く根付いてしまっていることだと思うのです。

5. 未来に向けて

世界では昔から女性の役割、男性の役割、宗教的な教えなどがあります。私たちがお手伝いしているタイの山岳民族の女の子たちは売られてしまうことがあります。前世に悪いことをしたから女として生まれてきた、だから、たとえ売られて、性産業に従事してでも、送金して親孝行を行いタンブン（徳）を積み、お坊さんへの托鉢などもしっかりとすることで、来世に男として生まれ変わると信じられているのです。私たちがいくら「そんなのはうそですよ。男女平等ですよ」と言っても、信じてもらえません。だから、教育を受けてくれることにより、自分たちで物事を考えて、次の世代に「これはおかしい。考え方を変えていこう。法律を変えよう」という気持ちになるようにしなければいけません。

イスラム教徒の国の中には非常に近代的な考え方もあって、女性たちの権利などが守られているところもありますが、シリアやヨルダンのような古い風習がある国では、契約結婚をします。持参金をもらうことで、借金や貧困から逃れるようにするのです。3



～4か月の結婚をすれば妊娠し、契約後にシングルマザーになることもあります。売春婦ではないというふうに分身の誇りを保てるようですが、このような風習が現在もまだ残っていることには驚きを禁じえません。児童婚や、奥さんは4人までいてもいいという状況の中で、女性たちの権利はどうなるのでしょうか。

いろいろな国々の、女性に対するいろいろな文化を、どのようにして変えていくか。これは本当に大きな課題です。神戸の大震災では女性は男性より1,000人も多く命を落としました。それは、家におじいちゃんおばあちゃんがいると置いて逃げられないからです。子どもがいたら、帰ってくるかもしれないから母親としてこの家から出られないということで、自分のことは一番最後になってしまいます。待つわけです。生活の中で女性としての自分の役割がずっと刷り込まれていて、災害時や大変なときに女性たちはなかなか逃げられない。インド洋津波のときも、タイの女性たちは夫が家に帰ってこない家から出られないので、被害に遭ってしまいました。

私は今、大学で男女共同参画についていろいろな話をしますが、日本は今年、ラグビーのワールドカップがあり、2020年はオリンピックもあります。2025年には万博が大阪で開催されます。その中で観光はものすごく大事な収入源になってきます。観光に従事する7割は女性です。しかし、決定権を持っている人たちは男性なので、女性の役割や意見が吸い上げられていません。女性たちがもっとみんなと一緒に物事を決定するような立場にいられるような状況をつくらなければいけません。「どうせ私は女だから」ということが、一番私たちを妨げています。男女共同参画と肩肘を張って戦うのではなくて、平等でないことに対して「これはおかしいでしょう」ときちんとして冷静に発言し、女性たちを支援することが大切だと思います。自治体などで委員会を立ち上げたときに、女性が多いにも関わらず、男性がそこにいると男性にその場を委ねてしまいがちです。それは、私たちの先入観念として男性の方が女性よりリーダーとしてふさわしいのではないかと、もっと頑張ってくれるのではないかと、立ててあげれば彼も頑張ってくれるでしょうみたいなところがあるのではないかと思います。そういうところから抜け出していかないと、本当の意味での男女平等にならない。そういうことが次の世代の女性たちにもつながっていくことを大変心配しています。



第2部 対 談

講 師：マリ・クリスティース

(異文化コミュニケーター、元国連ハビタット親善大使)

聞き手：白 井 文

(一財)大阪府男女共同参画推進財団業務執行理事、前尼崎市長)

(白井) 本日はご参加くださいましてありがとうございます。私とマリさんと少しやり取りをさせていただき、時間があれば会場の皆さまからもご意見やご質問を受け付けたいと思っています。

第1部では、マリさんが代表をされている「アジアの女性と子どもネットワーク」の活動をご紹介いただきましたが、活動を始めるにあたり、何かきっかけがあったのですか。

(マリ) 佐賀にある認定NPO法人地球市民の会の、今は亡き古賀武夫さんと青年の船で知り合い、「私たちはタイで学校を建てています。一緒に行きませんか」と言われて行くと、古賀さんのグループのいろいろな女性たちが来ていたのです。1995年当時、日本では不登校が多くなってきていました。そんな中で、学校へ行きたくても行けない子どもたちと遭遇し、親たちが子どもを学校に行かせたいという気持ちが良くわかりました。そのとき、そこの校長先生が、「寄宿舎と学校を建ててくれたら、もっと子どもたちを入れることができます」と言うので、「では学校を建てよう」「学校は幾らで建つのですか」と聞いたら、300万円あれば学校を建てられるとのことでした。では、日本に帰ってバザー活動をして300万円集めて学校を建てよう、アジアの女性と子どもたちのためのネットワークをつくろうという、本当に軽いノリだったのです。

うちの事務局長は、PTAをやっていたのですごく組織力を持っているのです。女性はみんなそうですよ。仕事はしていない方も、PTAをしたり、サッカーのママや野球のママをやっていたりします。彼女がそういう組織のことを、私は人寄せパンダを、他の人たちはバザーなどと、それぞれ自分のやれることをやろうということで、女性5人でスタートしたのです。

そして、たまたまNTTドコモの大星社長と対談すると、彼は共働きの女性たちを支援することが大事だと会社の中でも女性の登用を多くしていらっしゃいました。ちょうど社会貢献室を作った時でもありました。「マリさんはどんなことをやっているのですか」と言われ、「今、学校を建てようと思って資金集めをしています」と言うと、「学校は幾らで建つのか」と聞かれたので、「300万くらいだから5年くらいいたら建てられると思います」と言うと、「たったの300万円ですか。では、うちの会社が出しますから、明日いらっしゃい」と言われたのです。実際には総務部などとのやり取りが大変だったのですが、そこからスタートして、10年間毎年学校を建てていただきました。そして、社員の方々も一緒になり、いろいろと私たちを育ててくれたのです。

また個人の方で、3年前に図書館を建ててくださった方もいます。リタイアして、「今まで何もボランティア活動をしたことがないから、私たちの退職金でやってください」とご夫妻で仰ってくださいました。「では、学校の給食室に名前を付けます」と言うのと、「そんなものは要らない。子どもの好きな花の名前を付けてください」と言われ、このようにご厚意をいただきながらボランティアをしてきました。

(白井) 私たちも女性を応援する活動をしています。寄付をお願いしたりしてもなかなかうまくいきません。マリさんは、どのようにされていますか。

(マリ) 私たちが支援している村の子どもたちは、髪の毛が真っ赤で、なぜお金がないのに赤く染めているのだろうと思っていたら、校長先生が「ヨード分が足りないからです。卵を食べると黒くなるので、鶏小屋が必要です」と言われたのです。15万円くらいで鶏小屋ができて、卵は子どもたちに食べさせ、あとは市場に売ることができるので、私たちはいつも15万円で切っています。

(白井) 切るとはどういうことなのですか。

(マリ) それ以上の寄付を受けないのです。このNGOはずっと続けられるかどうか分からないからです。ずっと奨学金を出しますとか、ずっと支えますということではできないので、プロジェクトごとに切る形にしているのです。そういう点では、参加される方々にとっても参加しやすいのではないかと思います。

(白井) トイレのお話でLIXILという会社を巻き込んでいらっしゃいましたね。うまく巻き込む秘訣みたいなものがあるのではないかと思います。

(マリ) 秘訣は全然ないです。本当に必死にみんなで足を運んで、すごくおこがましい言い方ですが、出会いを大事にしています。今日もびっくりしたのですが、白井さんと会議が始まる前に話をしていたら、実は以前に神戸で…。

(白井) 阪神大震災の後ですね。

(マリ) アスベスト用の粉塵マスクを、子どもたちに配ってあげようと思ったのです。長田区の商店街では、クロシロライドという非常に強いアスベストが落ちていました。昭和29年から、防火にいい素材だから大量に使うようにと消防署が言っていました。それが後になって、発がん性があることが分かったのです。子どもたちは背が低いので、そこを歩くと吸い込むから、早くマスクを持っていこうということで、横浜にある会社に子ども用のマスクが欲しいと言うと、「子ども用はないので、シートを二つ

にして作ってあげます」と社長さんが言って、夜中に社員が2万枚を作ってくださいました。250万円かかりました。お金がないので、私が仕事をしていたミキプルーンに連絡して出してもらいました。

今度は配る人がいないので、大阪まで新幹線に乗って、車でやっとなり神戸市役所までたどり着いてマスクを渡すと、「みんなの分がそろそろまで配れません」と言われたので、「私たちが配ります」と言って、地元の青年会議所をお願いをしたのです。すると、その青年会議所の会長の息子さん地震で亡くなっていたのですが、「一緒に行きましょう」ということで一緒したのです。そのときの方が、今日、いらしていたのです。もう一度お目にかかれるなんて、やはりご縁は不思議なものです。そういうことでずっと何年間もやってこられたわけです。

(白井) 行政は平等でなければいけないのか何か知りませんが、神戸市は2万枚もあるのに結局1枚も配れませんという判断をしたというお話は、行政に携わっていた立場としては「すみません」という感じです。確かに平等は大切だとは思いますが、資源の有効活用はとても重要で、平等よりももしかしたら重要かもしれない。優先順位を決めて、その2万枚を配ることが大切だったのではないかという話を、朝、たまたましていましたね。

またマリさんは、台風19号により、千葉県では電気も使えなくてみんな苦勞していたので、たまたま関わっている会社がアルミホイルを使ったソーラーキッチンができるものを作っていたので、千葉県で活用できないかと、千葉県の防災担当者に電話をしたそうです。そうすると「その装置は何個ありますか」と聞かれたので、「50個かな」と言うと、「50個では全然足りませんから配れません」と言われたということです。神戸市の時代とちっとも変わっていないというご意見を頂き、本当に考えさせられました。

今日は自治体の関係者の方もいらっしゃると思いますが、多分、ここにいらっしゃる方々はもっと柔軟に有効活用しなければいけないということをご理解していると思いますし、そういう行動をされるのではないかと思うのですが。

(マリ) よろしく願います。

(白井) SDGsの啓発については皆さんも理解されていると思いますし、実際にさまざまな啓発活動もされていると思いますが、目標1・5・17のように、日本の達成度合いが大変低いものがたくさんあります。意識を変えることはすごく難しいとお考えだと思いますが、行動を変えていかなければ意識も変わらないし、行動を変えることによって意識も変わっていくと思うのですが、何かアドバイスを頂ければうれしく思います。

(マリ) 日本語では「持続可能な開発目標」となっていますが、私は「開発」という言葉が間違っていると思うのです。「持続可能な発展目標」にしなければいけないような気がします。「開発」というと、もっと作らなければいけないのではないかというイメージがわいてくるからです。

Millennium Development Goals (MDGs) として、8個の目標が最初にできました。これは、発展途上国が2000年から2015年までに、早く先進国に追いついてもらえるように、子どもの貧困とか飢餓とかいろいろな問題を達成しなければいけないということで、発展途上国向きに作っていたものでした。そして、2015年になる少し前に、どこまで達成できたかを評価しなければいけないということで、国連が評価するとともに次の15年、30年までどうするかを考えたときに、置いていかれた人たちがたくさんいたということで、No one will be left behind (誰一人取り残さない) ということになりました。さらに加えて2012年にブラジルで開催された国連持続可能な開発会議(リオ+20)で、このまま開発が進むと地球はもう持たないだろうということが確認され、新たにスタディグループを作り、環境の問題を含めることになっていったのです。

ルート66というアメリカを横断する道があり、もうボロボロでインフラ整備が必要になってきましたが、すべての先進国で象徴的なものがボロボロになってきたのです。ついこの間も、イタリアの大きな町を横断する橋が突然落ちて、大勢が亡くなりました。だから、先進国を含めてSDGsに自分たちなりに関わっていかないといけません。道路はできていて公共交通がちゃんとできていますが、車がたくさんあることによって事故が多い。事故をなくすようにしましょうとか、SDGsは扉がたくさんあるわけですから、自分の国がどこの扉から入るかを見なければならぬわけです。

SDGsの目標5、ジェンダーを考えると日本ではどう考えていくのか。今はLGBTやトランスジェンダーの話もあるので、いろいろな方々を受け入れて、平等であること、対等であるという認識を社会が持ってくれないと困るわけです。インドやイスラムの国へ行くと、同性と一緒に生活しているとか、同性同士の恋愛というだけで死刑になる国もあるわけです。それはおかしい。信仰する権利もあるし、ジェンダーも自分が選ぶ権利がある。このようなことをどう認識させていくのか。SDGsの関わり方は、国や文化によってそれぞれです。人間としての尊厳が守られるよう、みんな考えていくことが大事です。

それと、私がすごく気になるのはdecent workです。日本語でdecent workをどう訳すか。「働きたい」ではないのです。私はいつも学生たちに、「娼婦はdecent workだと思いますか。食べていく術がない、教育もない、どこにも雇ってもらえなくて体を売らなければどうするか」と聞きます。でも、そういう人たちにも誇りやプライドはあるわけです。例えばアムステルダムへ行くと、飾り窓があります。観光客が前を通ると、飾り窓にいる女性たちがとても色っぽく振る舞うのです。彼らは国がちゃんと守ってくれていて、健康管理や、性行為を持つときにはお客がコンドームをしな

ければいけないようになっていきます。彼らにしてみると、それは自分たちが収入を得られ、誇りを持ってやっている仕事だからdecent workであるわけです。しかし、むちをたたきつけられて金山を掘っているのはdecent workでしょうか。私たちが思っているdecent workとは何なのか。自分がプライドを持ってできるような環境をつくってくれているのがdecent workです。搾取されたり、奴隷化させられたり、人が売られたり、臓器を売るために子どもが誘拐されたりするのはdecent workと云うのでしょうか。だから、「働きがい」の解釈は、その国ごとに自分たちで決めていかなければいけない定義なのです。日本はdecent workを「働きがい」という言い方になっていること自体、どうなのかと思います。今は働き方改革と言いますが、もっと働きたい人たちがいるのに働かせてくれないということもあります。

私も大学に行くときは職員証を着けるのですが、何時から何時まで働いたかを見るのかと思っていたら、働き過ぎていないかを見ているのです。そういうことのパランスがよく理解できません。働かなければいけないのに働けない、働き過ぎているのにうまく緩和されていない仕事もあって、ここをどう直すのでしょうかね。

(白井) 私も市長という仕事をしていたときは、365日のうち360日は働いていました。議会が始まると、朝の4時くらいまで市役所にいました。しかし、私の仕事は自分である程度コントロールができるし、しなければいけない仕事でした。現在、働きすぎているのに休めない、休みたいけれど休めないという状況の改善に向け、長時間労働を見直しが進められていますが、労働時間の管理も短期間で見るのか、長期スパンで見るのかも考えていかないといけないと思います。

この辺で皆さんのご意見やご感想をお聞きしたいと思います。

(フロア1) 今の働き方改革の話とは少しずれますが、今日のテーマは「女性にとってよいまちはみんなにとってよいまち」です。私は地域の防災にどうやって女性が参画するかということで発信しています。防災は力仕事だけだと思われていて、女性が一番参画しづらい分野です。それをどうやって日常のことにするか。日常のまちづくり、日常の暮らし、日常の人間関係がゆがんでいとなかなかできません。ですから、非常時のことをいかに日常レベルに落とし込んでいくかでいつも悩んでいます。今日のテーマも同じように感じたので参加させていただいたのです。

「女性にとってよいまち」というと、インスタ映える美しいまちとか、若い女の子たちが観光に来るまちと誤解されがちです。それをどうやって「みんなにとって」と、女性だけではなく一般化していくか。女性だけが助かる防災ではなく、女性が突破口を開いて、全ての当事者で地域防災ができるようなことができないかと悩んでいます。何かアドバイスを頂けたらと思っています。

(白井) とても難しいご質問だと思います。ここで言う「女性にとってよいまち」とい



うのは、いわゆるマイノリティにとってよいまちはみんなにとってよいまちという意味だと思っています。

(マリ) 大学の講義みたいになってしまうのですが、弱者にとってよいまちは、結局、みんなにとってよいまちだというイメージがあります。まちづくりというときに私たちはどうしても男性思考で、ものとして見てしまうのです。産業革命以降は全て男性の視点で都市を造っているのです。家族が家にいて、男性は朝、会社に行く。公共交通のシステムもそうですし、全て男性向けにできています。それが少しずつ、変わっていています。私は最初に温泉に行ってびっくりしたのですが、男性のお風呂の方が大きくて豪華なのです。女性のお風呂はなぜ小さいのだろうと思っているうちに、だんだん逆転し、今は女性のお風呂の方が豪華です。公共の施設でも、女性のトイレの数が多くなったり、おむつが取り替えられるような設備が整ってきたりしました。最近では、男性トイレでもおむつが取り替えられるようになっていたりしています。しかし、今までの都市計画やまちづくりは男性視点でできています。どうやってまちを活用していくか、その中のシステムもすごく重要なのです。

若い女性たちが仕事をしたいと思っても、仕事に就いていなければ保育園で子どもを預かってもらえません。でも、子どもを預かってくれないと仕事が見つからない。なぜ、こういう理屈になっているのか。私の娘も仕事をしているとき、子どもを乳母車に乗せてバスに乗ると、「こんな所に子どもを連れてきたら押しつぶされて死んでしまうわよ」と近くのおばさんに言われたのです。女性が女性に言っているのです。また、電車で痴漢が多いということで、女性だけの車両になっていたり、最近では、男性は万歳して電車に乗ったりしていますね。これはよいまちづくりではないと思うのです。

まちづくりというときに、私たちはハードとソフトの両方を見なければいけません。私たちのニーズにちゃんと応えてくれるような仕組みが必要です。上の子が行っている保育園に下の子を入れてくれない。すると、別々の所へ連れていかなければならなくなり、くたびれて、もう仕事などしたくないから家にしようということになります。シングルマザーだと福祉を受けた方が楽ということで、結局、生産能力を持っている女性までもが生産できなくなってしまいます。まちづくりというときに、弱者とは単に障がいを持っているとか差別されているというところの弱者だけでなく、そのときの社会の仕組みの中で弱者である人をどのように支えていくかということです。人は誰でも幸せになる権利は持っているわけですから。プロセスですから、終着点はないと思います。今何が必要で、早急にこういうことをやっていかなければいけない。そういう考え方を持つこと自体が、みんなにとっていいまちではないかと感じます。

(フロア1) 社会の仕組みの中の弱者ということで、この状況ではこの人が弱者になり得るというアンテナをいつも持つということですね。

(白井) 男女共同参画センター等で女性を対象にした防災セミナー、震災のときにどう行動をしたらいいかというセミナーが開催されていますね。なかなか女性の参加者が少なく広がらないかもしれませんが、地道にそういうことに取り組んでいくことが、私たちが何かできるのかを感じるところにもつながるのではないかと思います。

今、マリさんは東京女子大学でどんな講義をされているのですか。

(マリ) 女性と福祉をやっています。あとは都市計画やまちづくりを教えています。

(白井) 学生さんたちの反応はどんな感じですか。テストもあるのですか。

(マリ) 私はテストをしません。講義に対する自分の意見をレポートとして書いてもらっています。日本の学校はあまり自分の意見を育てずに卒業させてしまうからです。私は海外で育ったので、What do you think? (あなたは何を考えているのか) ということを大切にしています。日本ではみんなと同じように考えていなければ仲間外れにされたりすると思われているみたいですが、欧米の場合は、違う考え方を持っていて、なぜそう思うかをきちんと伝えることが大事なのです。自分のキャラクターや性格、個性がそれで育つわけですから、みんなと同じだとすごくつまらないと思うので、なるべく自分の意見を書くように言っています。

(白井) その辺はすごく日本人は苦手ですね。私たちの時代はそういう訓練を受けてこなくて、板書をノートするような時代でした。今の学生さんたちは鍛えられていますね。

(マリ) 今、AIという言葉をよく聞きますが、AIとはartificial intelligenceで人工知能のことです。でも人工知能を作るのは人間です。人工知能も結局、相手が何を次に言うかを想定してコンピューターが出すので、入力しているのが男性であったり、私たちが持っている価値観が男性中心になっていたりするので、男性寄りなのです。英語では「his」で出てきて、「hers」では出てこない。ジェンダー・バイアス・フリーにするには、もう一回人工知能を教育し直さないといけません。

これから就職する若い方に。企業は情報をどう使って今までにないものを作っていくかを求めています。私は「検索しなさい」と言います。「私が話す何かに疑問を持ったり、間違いだと思ったら検索して、『先生の言ったことはこうだけど違うと思います』と言いなさい」と言うのですが、誰も言ってくれません。取り出した知識を自分でどう調理するか、暗記する力ではなく、それを自分で創造していく力がすごく大事だと思います。

そのような状況ではすごく世界に遅れてしまいます。外国ではどんどんそれをやっています。中国や韓国、インドの学生はそういうことはとても早く、女性の起業家

も多くいます。大学を出る前に女の子たちは会社をつくっています。今はパーツの仕事が多いので、委託した分野だけがすごく上手であれば仕事はできてしまいます。自分たちでいろいろな会社を立ち上げ、フリーで仕事をする女性が多くいます。

(白井) 検索するといろいろな情報が出てくるのですが、どの情報がより正確なのかとか、どの情報をセレクトするのかというリテラシーを磨いていかないといけないですね。

マリさんとは今年の6月ごろから親しくしていて、月に1回、一緒に会議に出席していますが、いつもご自身の考えをしっかりと述べられるのに刺激を受けています。私は比較的発言する方だと思うのですが、それでもやはり、私たち以外は全部男性の中で、わざわざ言わなくてもいいかとか、ジェンダーのことをまたここで持ち出さなくてもいいかと思ってしまうのです。そういうところが、生い立ちの差かなと思います。

(マリ) 異文化理解が私の専門の一つでもあるのですが、私が日本に来たとき、最初は母の姉のところに居候をしていました。別れ際に母が、「日本へ行くとYou must be small」と言ったのです。最初に私が与えられた部屋は、伯母が使っていない3畳間だったので、You must be smallというのは狭い所にいなければいけないということだと思っていたのです。しかし、だんだん日本語が分かるようになって、遠慮することだと思ったのです。

また、私は小さいころから父に、「分からないことは人に聞きなさい。聞かれて、教えてくれない人はいない。相手はあなたの知らないことを教えたいという気持ちだから何でも聞きなさい」と言われていたので、学校ではいつも先生に「why?」と言っていました。しかし、日本の親戚に「どうして?」「どうして?」と聞くと、「もういいから」「理屈っぽいわね」「しつこいからやめなさい」と言われて、答えてくれなくなってしまいます。日本はあまり質問をしてはいけない文化なのだとだんだん分かってきました。異文化理解はすごく大事です。その中でどう振る舞っていくかは、小さいときから訓練されていないと難しいと思いました。

(白井) 日本の社会では「忖度」というのがあり、マリさんの環境とは随分違っていたと思います。世界の中で通用する国民性を磨いていくとすると、その辺は随分努力しなければいけないですね。

(フロア2) SDGsで最近特に思うのは、企業は今まで男性社会でしたが、中性もしくは女子力が本当に大事だと思っています。女性の方が強くなったりして、今、社会がだいぶ変わってきていると思います。女性のポジションは変わってきてつつあるのかなと思いますが、それを受け入れる態勢がまだできていないのではないかと非常に感じ

ています。

相手が何を考えているか、相手がどうしたら喜ぶかとか、そういうことを考えられる男性がこれからは大事です。それと、女性で能力のある方がたくさんいらっしゃるので、その専門分野の人に集まってもらうとジェンダーの問題やいろいろなことが解決されていくのではないかと思います。

(白井) 今発言して下さった方はすごく勇気を持って発言して下さったのではないかと思います。女子力というのがどういうところで使われるのかはまた微妙なところではありますが。

では、最後に一言ずつ発言して終わりにしたいと思います。次の世代を育てていくことが、今、大人たちのすごく重要な役割だと思います。マリさんも1部で、タイの山岳地帯のお話で、なかなか意識を変えることは無理だけれども、次の世代で意識を変えていくように考えていかなければいけないのではないかというお話がありました。

自分たちに何ができるのか。やはり若い世代に知ってもらうことや若い世代に今の私たちの社会の中で、男も女もいろいろなところで活動している、リーダーシップを発揮している、意思決定の場にいる姿を見せることだと思うのです。そういう意味で少し笑い話的な話をさせていただきます。

尼崎市は、私が市長を2期させていただき、私の後に市長をしているのも女性で、5期連続で女性市長が続いている唯一のまちです。すると、尼崎市内の小学生の男の子が、たまたまテレビで隣の西宮の市長が話をしているのを見て、「お母さん、市長さんは男の人でもなれるの?」と聞いたのです。彼は生まれたときからずっと女性市長だったので、市長は女性なのだと思います。これは本当の話です。そのように、目から入ってきたり、耳から聞こえてきたりすることは説得力があるので、さまざまところに女性がいる姿を見せることがすごく大切で、そういうことが持続可能なまちづくりにもつながっていくと思います。皆さまもそれぞれに活動してリーダーシップを発揮されていると思いますが、その楽しさを積極的に女性に伝えていただき、できれば次のリーダーも女性に引き継ぐような形になり、良きリーダーがどんどん地域が増えていくといいと思っています。

(マリ) 去年、日本には難民申請が1万9000人くらいありました。実際に通ったのは47人だったような気がします。私も今は日本国籍ですが、元はアメリカ国籍でした。これから、外国から来る方々に頼りながら生活をしていく日本にするのか、日本だけで人口をどんどん減らしながら頑張るのか、それを考えていかなければいけない過渡期に来ていると思います。

夕べ、コンビニで甘酒を買いました。運転していたのでお酒が入っているとまずいと思い、店員さんに「これはお酒が入っていますか」と聞くと、「日本語、できません」と言われました。それが普通だと思うのか、それとも違和感を覚えながら生活を

するのか。これを日本人はこれから考えなければいけないと思います。

国際化という概念は大好きですが、そういう人たちがたくさん自分のそばにいて、いろいろな言葉が交わされ、いろいろな考え方もある中で、自分が偏見を持っていたり、差別の気持ちを持っていたりするときに、この差別や偏見は、いつどこでその種が植え付けられたのかと思いながら、それを自分で変えていく気持ちがあるのか、それともずっとそれを継続させていくのか、次の世代にまた継続させるのかを考えていかなければいけないと思いますし、どういう社会をつくっていくのかは日本人同士にも関わることです。女性は柔軟性があって利害関係がほとんどないわけですから、とてもやりやすいと思います。ぜひそういう面でも社会を引っ張っていただけたらうれしいと思います。

(白井) 第2部のトークはこれで終わりしたいと思います。皆さま、ありがとうございました (拍手)。

